

# はじめに

この度はバストリオのエモーショナルにご来場ありがとうございます。

演出の今野裕一郎です。

今回、この作品の作業をしている時、手元には一冊の写真集がありました。

「ESSAYS」というタイトルの、セバスチャン・サルガドという写真家の写真集です。

彼の著作から大きな影響を受け取ったことをここに記しておきます。

戯曲というものでなく、台本のようなものがバストリオの現場にはあります。

その始まりに書いた文章を読んでいただき、本番を見てもらえたら嬉しいです。

本日は誠にありがとうございました。

会場には吊り下げられた世界があって、そこにはいくつかのものがぶら下がっていて、  
反転している。まだ発見されていなかった空間をイメージしてある。

誰かがいたのかもしれない土地だ。

会場の奥には銭湯であった跡が残っていて、スピーカーが置かれている。

そこからはここにいない音楽家から届いた音が流れて、会場に鳴ったりする。ここは遠くのイメージである。

一つのスクリーンには字幕と写真がでる。

フロアは柱によって4つに区切られている。

そして観客の目の前には、出演者の日記が積み上げられる。

人がたくさん集まっていた時がある、そしていまもフロアには人が集まっている。

遠くを、近くを、土地を移動する人間たちが集まっている。

出演者や観客には移動を繰り返して生きる日常がある。

友人や恋人や仕事場の人や家族や遠くの人たちにも日常がある。

移民たちは大きな移動を繰り返してきた。わたしたちの先人たちがそうだったように。

人間はどこかの土地へと向かう。そこで感じたり、考えたりする。

ある土地で、それぞれ違うものたちが集まって、生きている。

BUoYというこの空間は、地下で、天井も低く暗い。陽は当たらないが人がいる。

その存在が環境に寄りかかることなく存在すること、逡巡の中で、

そこに集まった他者に開けて存在することができるかどうかで、明るい光がさしてくるのか、影がさすのか、  
それが今回の舞台である。

人を見ること、見せること、表現すること、生きている存在があること、ここに人が集まっていることを大事にやる、  
ここにいない遠くのイメージを想像して、ここにある私の身体と重ねることを恐れず、ここにいないものたちを敬い、  
ここにいる自分の存在を生きることを目指している。

始まりは役者が一人ずつ、この部屋に入ってくるところから始まる。

出演者たちは一つ、一番好きな場所から拾って来たものを拾って現れる。